

けいせいあわ なると

## 傾城阿波の鳴門

〔解 説〕

明和五年（一七六八）六月、竹本座初演。近松半二、竹本三郎兵衛、八民平七らの合作。夕霧伊佐衛門を題材にした近松門左衛門の「夕霧阿波鳴渡」をもとに、阿波徳島、玉木家のお家騒動を絡ませたものです。

当時、阿波の浪人が、大坂玉造に仮住まいをして、詐欺・ゆすり・追いはぎなどを働いていた。ある日、順礼の子が、金を持っているのを知り、だまして家に連れ帰り、深夜しめ殺して、死体を畑へ埋めた。しかしこれが露見したため、召し捕られ、重罪に処せられた、という実説を取り入れています。

全十段のうち、本日上演する八段目「十郎兵衛住家」以外はほとんど上演されていません。

〔あらすじ〕阿波徳島玉木家の若殿が遊女におぼれているのに乗じて、悪家老の一味はお家横領を企てていました。同じく家老の桜井主膳はこの状態を憂えていたのですが、預かっていたお家の重宝「国次（くにつぐ）」の刀を盗まれてしまいます。この刀の探索の為、家臣十郎兵衛は、銀十郎と名を変えて、妻お弓とともに盗賊の仲間に入ります。ある日、十郎兵衛の留守に、順礼の子が門口にやってきました。お弓は、話を聞くうちに、国元に残してきた娘のおつるとわかりますが、親子と名乗ると盗賊の罪が娘にかかることを恐れ、一旦は追いつ返します。しかし、今、別れてはもう二度と会うことが出来ないと思ひ直し、おつるの跡を追います。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

（一般社団法人 義太夫協会発行）

## 順礼歌の段

よしあしを、何と浪花の町外れ、玉造に身を隠す、阿波の十郎兵衛本名隠し、銀十郎と表は浪人、内証は人はそれ共白浪の、夜の稼ぎの道ならぬ、身の行末ぞ是非もなき。折から表へいきせきと、飛脚と見てへて草鞋がけ、内を覗いて

「申し、この状届けます」

と、投げ出す一通、女房取上げ、上書きに『銀十郎殿へ急用』と書いた許りで下の名は

「内儀様、覚えがござりますか。私も人伝てに言付かつて参りしたれど、必ず先へ直々にと、念入れて申されましたが、内方へ来る状かな」

と念を入れるれば

「ア、成程々々、下の名はなけれども、上書きの手はたしかにこちらに見知りがごさんす。置いて往んで下さんせ。夫も今は留守なれば、帰られ次第見せませう。マア這入つて煙草でも」

「ア、イヤイヤ、まだ外へ届ける状、急用なればもうお暇。お返事あらば、後から」

と、言ひ捨て出づる町飛脚、元来し道へ立帰る。

後打ち眺め女房が、心がかりと封押し切り、読む度毎に驚く胸

「ヤア、こりや是、夫を始め仲間の衆へも吟味が

かゝり、詮議厳しくなつたる故、捕へられし者もあり。最早遁れず立退け、との知らせの状。スリヤ夫十郎兵衛殿の身の上も、今日一日に迫つた難儀。昨日長町裏で危い所を漸々遁れ、ヤレ嬉しやと思ふ間

もなく、今又この状の文体では、なかなかかうして  
ゐられぬところ。我とても女房の身、ことに騙りの  
同類なれば、罪科遁れぬ夫婦が命、今更驚く気はな  
けれど、一合取つても侍の、家に生れた十郎兵衛殿、  
盗賊騙りと成り果しも、国次の刀詮議の為、重い忠  
義に軽い命、捨つるは覚悟といひながら、肝心のそ  
の刀、在り処も知れぬその内に、もしこの事が頭は  
れては、これまで尽くせし夫の忠義、皆無駄事とな  
るのみか、死んだ後まで盗賊に、名を穢すのが口惜  
しい。盗み騙りも身欲にせぬ、女夫が誠を天道も、  
隣れみあつて国次の刀の詮議済む迄の、夫の命助け  
てたべ」

と心の内に神仏、誓ひは重き観世音

へふるさとを 遙々こゝに 紀三井寺

「順礼に御報謝」

と、言ふも優しき国訛

「デモしほらしい順礼衆、ドレドレ報謝進ぜう」

と、盆に白米の志

「アイく、有がたうござります」

と、言ふ物腰から棲外れ

「可愛らしい娘の子、定めて連れ衆は親御達、国は

いづく」

と尋ねられ

「アイ、国は阿波の徳島でござります」

「何ぢや徳島、さつてもそれは、マア懐しい。わし

が生れも阿波の徳島。そして父様や母様と一緒に順

礼さんすのか」

「イエく、その父様や母様に逢ひたさ故、それで  
わし一人、西国するのでござります」

と、聞いてどうやら気にかゝる、お弓は猶も傍に寄

り

「ム、父様や母様に逢ひたさに、西国するとはど  
うした訳ぢや、サそれが聞きたい、言ふて聞かしや

く」

「アイ、どうした訳ぢや知らぬが、三つの年に父様  
や母様も、わしを婆様に預けて、どこへやら往かし  
やんしたげな。それでわたしは婆様の世話になつて  
往たけれど、どうぞ父様や母様に逢ひたい、顔が見  
たい。それで方々と、尋ねて歩くのでござります」

「ム、シテその親達の名は何というぞいの」

「アイ、父様の名は十郎兵衛、母様はお弓と申しま

す」

と、聞いて吃驚

『ア、コレ、アノ父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つの年別れて、婆様に育てられてゐたとは、疑ひもない我が娘』と、見れば見る程、見覚えのある額の『ヤレ我子か、懐しや』と言はんとせしが、待て暫し

「オ、それはまあまあ、年端も行かぬに遙々の所を、よう尋ねに出さつしやつたのう。その親達が聞いてなら、さぞ嬉しうて、飛立つ、サア、飛立つ様にあらうが、儘ならぬが世の憂きふし。身にも命にもかへて、可愛い子を振り捨て、国を立退く親御の心。よく／＼の事であらう程に、酷い親と必ず必ず恨みぬがよいぞや」

「イエ、勿体ない、何の恨みませう。恨みる事はないけれど、小さい時別れたれば、父様や母様の顔も覚えず、余所の子供衆が、母様に髪結うて貰うたり、夜は抱かれて寝やしやすを見ると、わしも母様があるならあの様に髪結うて貰はうものと、羨やましようござんす。どうぞ早う尋ねて逢ひたい、ひよつと逢はれまいかと思へば、それが悲しうござんす」と、泣いちやくりするいぢらしさ、母は心も消え入る思ひ

「さて／＼世の中に、親となり子と生るゝ程深い縁はなけれどもナア、親が死んだり子が先立つたり、思ふ様にならぬが浮世、こなたもどれ程尋ねても、顔も所も知らぬ親達、逢はれぬ時は詮ない事。もう尋ねずと、国へ往んだがよいわいの」

「イエ〜、恋しい父様や母様、たとへいつ迄かゝつてなど、尋ねうと思ふけれど、悲しい事は一人旅ぢやてゝ、何処の宿でも泊めてはくれず、野に寝たり、山に寝たり、人の軒の下に寝ては、た、た、叩かれたり。怖い事や悲しい事も、父様や母様と一所にゐたりや、こんな目には逢ふまい物を、何処にどうしてゐやしやんすぞ。逢ひたい事ぢや〜逢ひたい」

と、わつと泣き出す娘より、見る母親はたまり兼ね  
「オ、道理ぢや、可愛や、いぢらしや」

と、我を忘れて抱き付き、前後正体嘆きしが

「オ、段々の様子を聞き、我が身の様に思はれて、悲しいとも情ないとも、言ふに言はれぬ事ながら、兎角命が物種。まめでさへゐりや、又逢はれまい物

でもない。コレ、仕付けぬ旅に身を痛め、煩ひでも出りや悪い。何処をしやうどに尋ねうより、その婆様の方へ去んであるとの、追付け父様や母様が逢ひに往てぢや程に、聞分けて去んだがよいぞや」

と言ひつゝ内へ針箱の、底を探して豆板の、まめなを喜ぶはなむけ餞別と、紙に包んで持つて出で

「コレ、何ぼ一人旅でも、たとと銭さへやりや泊める。わづかなれども志、この金を路銀にして、早う国へ去にや、ヤ、必ず〜煩ふてばしたもんな」

と、金を渡せば、押し戻し

「アイ、嬉しうござんすれど、金は小判といふ物を、たとと持つてをります。そんなりやまうさんじます、忝なうござります」

と、泣く〜立つを引きとゞめ、無理に持たして塵

打ち払ひ

「コレ、もう去にやるか、名残りが惜しい、別れとむない、コレ、マ今一度顔を」

と引き寄せて、見れば見る程胸迫り、離れ難なき憂き思ひ、それと知らねど誠の血筋、名残り惜げに振り返り

「どこをどうして尋ねたら、父様や母様に、逢はれる事ぞ、逢はしてたべ。南無大悲の観音様」

へ父母の 恵みも深き 粉川寺

泣くく別れ、行く跡を、見送りく延び上り

「コレ娘、ま一度こちら向いてたも、ま一度こちら向いてたもいの。折角長の海山越え、艱難してあこがれ尋ぬるいとし子に、不思議と逢ひは逢ひながら、名乗らで退かす母が気は、どの様にあらうと思ふ、

狂気半分、半分は死んであるわいの。まだ生い先のある子をば、親故路頭に立たすか」

と、その儘そこにどうと伏し、消え入るばかり嘆きしが。起き直つて涙を押へ

「イヤく、どう思ひ諦めても、今別れては又逢ふ事はならぬ身の上、たとへ難儀がかゝらばかゝれ、又その時は夫の思案、程は行くまい追付いて、連れて戻らう。オ、さうじや、さうぢや」

と子に迷ふ、道は親子の別れ道、後を慕うて

しんぱんうたざいもん

## 新版歌祭文

〔解説〕安永九年（一七八〇）九月竹本座初演。作は近松半二（一七二八〜一七八六）です。お染久松の心中を扱った「袂の白しぼり」（一七一）や「染模様妹背門松」から登場人物、筋書き、有名な文句までもそのまま使った「お染久松物」の決定版で、上中下の三巻からなっています。中でも上の巻「野崎村の段」は度々上演され、段切りの旋律は多くの人に知られています。

〔あらすじ〕

〔野崎村の段〕油屋の丁稚久松は、集金した金を贖金とすり替えられ、野崎村の養父久作の元へ返されます。時代の小助が金を立て替えろ、と迫るので、久作は金を渡して追いつきました。久作は重病で盲目となった後妻、そしてその連れ子のお光と暮らしていますが、ゆくゆくは久松とお光を夫婦にしようと思っていました。久松が戻ったので、祝言をあげさせようとお光に支度をさせているところへ、かねてから久松と恋仲の油屋の娘お染が、跡を追って訪ねてきます。心中をも覚悟する二人に久作は意見して別れることを納得させますが、お光は二人の気持ちは揺るがないと悟り、自分が尼僧になることで、二人を一緒にさせようとしています。その様子を外で聞いていた油屋の後家は、前に久作が渡した金を尼への布施として差し出します。世間を憚り、久松は駕籠、油屋母娘は舟で大坂へと戻っていくのでした。

## 野崎村の段

引き立て、入りにける。後に娘は、気もいそぐ、

「日頃の願ひが叶ふたも、天神様や観音様、第一は親のお蔭。エ、こんな事なら今朝あたり、髪も結ふて置かふもの。鉄漿の付け様挨拶もどふ言ふてよかるやら」

覚束鱸拵へも、祝ふ大根の友白髪、末菜刀と気も勇み、手元も軽ふちよきちよき、ちよき、切つても、切れぬ恋衣や、元の白地をなまなかに、お染は思ひ久松が、あとを慕うて野崎村堤伝ひにやうやうと、梅を目当てに軒のつま。供のおよしが声高に、

「もうし御寮人様。かの人に逢はふばかり、寒い時分の野崎参り。今船の上り場で、教へてもらうた目印のこの梅。大方ここでござりませうぞえ」

「アアコレもそつと静かにいやいなう。久松に逢ひたさに、来ごとは来てても在所の事、日立つては気の毒。そなたは船へサ早ふぐ」

と追ひやり追ひやり

「物もふお頼みもうしませふ」

といふもこはごは暖簾越し、

「百姓のうちへ改まつた。用があるなら這入らしやんせ」

「ハイハイ卒爾ながら久作様はうち方でござんすかえ。さやうなら大坂から久松といふ人が今日戻つて見えた筈。ちよつと逢はして下さんせ」

といふ詞つき姿かたち。

「常々聞いた油屋のさてはお染」

と恪気の初物胸はもやもやかき交ぜ鱸俎押しやり、戸口に立寄り

「見れば見るほど美しい。あた可愛らしいその顔で、久松様に逢はしてくれ。オホそんなお方はこちや知らぬ。よそを尋ねて見やしやんせ阿呆らしい」

と腹立ち声。心付かねば、

「ホンニマア、なんぞ土産と思うても急な事、コレく女子衆、さもしれけれどもこれなりと」

と夢にもそれと白玉か露を袱紗に包のまま、差出せば、

「こりやなんぢやえ。大所の御寮人様、様々と言はれても心が至らぬ置かしやんせ。在所の女と悔つてか、欲しくばお前にエ、やるわいな」

とやら腹立ちに門口へほればほどけてばらばらと、草にも露銀芥子人形、微塵に香箱割れ出した。中へつかつか親子連、出てくる久作。

「アどうぢやどうぢや鱈は出来たであらう。さて祝

言のこと婆が聞いてきつい悦びぢや、が年は寄るま  
いもの。さつきのやつさもつさで、取りのぼしたか  
頭痛もする。ア、いかう肩がつかへて来た。橙  
の数は争はれぬものぢやわいの」

「さやうならそろそろ私が揉んで上げませうか」

「ソリヤ久松忝い。老いては子に随へぢや。孝行にかたみ恨みのないやうに、コレおみつよ三里をすゑてくれ」

「アイアイ、そんなら風の来ぬやうに」

となにがな表へ当り眼、門の戸びつしやりさしもぐさ。

「サアく親子とて遠慮はない。もぐさも痲痞も大掴みにやつてくれ」

「アイくソリヤマアきつうつかへてござりますぞえ」

「さうであらうさうであらう。ついでに七九もやつてたも。オツトこたへるぞこたへるぞ」

「サア父様すゑますぞえ」

「アツアツアアア、アアえらいぞえらいぞ。

ハ、ハ、イヤモウモウあすが日死なうと火葬は止めにして貰ひませう。丈夫に見えても古家。屋根も根太もこりや一時に割普請ぢや。アツくくく」

「オオ父様の仰山な。皮切はもうしまゐでござんす。ホンニ風が当ると思や。誰ぢや表を開けたさうな。

締めて参じよ」

と立つを、引止め、

「ハテよいわいの。昼中にうつとしい。ノウ久松、

久松、久松、コリヤ久松。よそ見してゐずと、しかくくと揉まぬかいの」

「サアよそ見はせぬけれど、覗くが悪い。折が悪い、

悪いく」

と目顔の仕かた。

「ヤ悪いの覗くのと、足に灸こそすゑてゐれ、どこもおみつは覗きはせぬがな」

「オ、さうでござんすとも。久松様には振袖の美しい持病があつて、招いたり呼出したり、エ、憎てらしい、あの病ひづらが這入らぬやうに、敷居の上へエ、大きくしてすゑて置きたいわいな」

「アツイくおみつ、何するぞい、どうするぞい。そこは頭ぢやがな頭ぢやがなコリヤ、頭に三里があるかい。アアトツトモウ、えらい目に合はしおるわいハ、ハ、ハ」

「コレおみつ殿。振袖の持病のと色々の耳こすり、はしたない事聞いてはゐぬぞや」

「ホ、変つた事がお氣に障つた」

「ホ、障らいぢや」

「コリヤをかしい。その訳聞くぞえ」

「オオいふぞや」

と我を忘れていさかいを、外に聞く身の気の毒さ、振りの肌着に玉の汗。久作ももてあつかひ、

「コリヤヤイ、コリヤ肩も足もびり／＼するがな、びり／＼。まだ祝言もせぬ先から、女夫いさかひの

取越しかい。灸行の代り喧嘩の行司さすのかやい。

二人ながらエ、嗜めたしなめ」

「イエ／＼構ふて下さんすな。今のやうな愛想つかしも病づらめが言はしくさるのぢやわいなア」

「なにをいふやらハ、ハ、モウ／＼両方ともおれが貰ひぢや。ヨ、仲直しが直ぐに取結びの盃、髪も結ふたり鉄漿もつけたり、湯もつかふて花嫁御、コリヤ作つて置け」

と打笑ひ無理に納戸へ連れて行く。その間おそしと

駈入るお染。

「逢ひたかつた」

と久松にすがりつけば、

「ア、コレ声が高ふござります。思ひがけないここへはどうして、訳を聞かして聞かして」

と問はれてやう／＼顔を上げ、

「訳はそちに覚えがあらう。わしが事は思ひ切り、山家屋へ嫁入りせいと、残しておきやつたコレこの文。そなたは思ひ切る気でも、私やなんほでもえ切らぬ。あんまり逢ひたさ懐しき。勿体ない事ながら、観音様をかこつけて、逢ひにきたやら南やら、知らぬ在所も厭ひはせぬ。二人一緒に添はうなら、ままも炊かうし織りつむぎ、どんな貧しい暮しでも、わしや嬉しいと思ふもの。女の道を背けとは、聞へぬ

わいの胴欲」

と恨みのたけを友禪の、振りの袂に北時雨、晴間は

さらになかりけり

ちかごろかわら たてひき

## 近頃河原の達引

〔解 説〕作者不詳。初演は天明三年（一七八三）と天明五年の説があります。京の聖護院であった心中事件を軸に、四条河原での喧嘩、親孝行な猿まわしのエピソードなどが織り込まれた、上中下三巻の世話物。中の巻「堀川猿廻しの段」の、「そりや聞こえませぬ伝兵衛さん」というおしゆんのクドキが有名です。

〔あらすじ〕井筒屋伝兵衛は遊女おしゆんと恋仲ですが、横淵という役人が横恋慕したため、四条河原で刃傷沙汰となり、伝兵衛は、横淵を斬り殺してしまいます。幫間久八が恩に報いようと身代わりになり、伝兵衛は落ちていきます。おしゆんは堀川の実家に返され、心配する母と兄はおしゆんに伝兵衛宛の退き状を書かせます。その夜、伝兵衛が忍んできて、母たちは追い返そうとしますが、暗がりの中、誤って伝兵衛を家の中に入れてしまいます。そこで先ほどの退き状を伝兵衛に突きつけるのですが、それは実は母と兄に宛てた心中の書き置きで、盲目の母と無筆の兄は、そのことに気づかず退き状と思い込んでいたのです。おしゆんの思いを知った母たちは、やむなく二人を共に落ちのびさせ、兄ははなむけに猿まわしを披露します。心中を決意した二人ですが、勘定役人だった横淵の悪事が発覚したことから、二人は許され、めでたく夫婦となるのです。

## 堀川猿廻しの段

〜鐘も哀れ添ふ。頃しも師走十五夜の、月は冴ゆれど胸の闇、過ぎし別れのいひかはし、死なば一緒と伝兵衛が、忍ぶ姿のしょんぼりと、たゞずむ軒は見覚えの

『たしかにこゝ』

と門の戸へ、さはる合図の咳払い、聞くにおしゆんが飛立つ思ひ、上げる枕も打ちはずゝ、与次郎は側に高軒。心もともに行燈の、燈ふき消し差足に心、急くはどあけ兼ねる。戸口の繫金表かけがねにも

「おしゆんぢやないか」

「伝兵衛さん。よう逢ひに来て下さりました」

と、いふ声、寝耳に与次郎がびつくり。起きると開くる門の口妹が姿も暗紛れ、捕へる袖のふりあはせ

おしゆんと心得伝兵衛を、無理に引込み取違へ、戸口をうちからびつしやり引立て

「そりやこそ突きに來をつたぞ。おしゆん。必ず外へ出まいぞや。戸口はおれが押へてゐる。ヤア、門にゐるは伝兵衛ぢやおのれを入れてよいものか」と、いふもがた／＼胸ぶるひ。

「コレナア兄さん。わしや表にゐるわいな」

「なんぢやわしや表にゐるわいな。ヤアその声色置いてくれ。そんなことくふおれぢやないわい。母者人々々々。伝兵衛がおしゆんを殺しに來たゆゑ、いま表へ立て出した。ガおれ一人では手が廻らぬ、こなたも加勢して下され。加勢々々々々」

とうろ／＼／＼／＼うろたへ騒ぎ。母親も

「なんぢや／＼／＼。伝兵衛の加勢。ム、まだ外に同類でもあるのか」

と、探り寄つたる伝兵衛が側。

「コレ〜おしゆん。顫ふるふことはないわいの。兄や母がついてゐるマア気を鎮みや」

と撫でさする、背中の手ざはり合点行かず

「コレ〜与次郎、どうやらこりや娘ではないやうな」

「ヤア暗がり紛れに、材木が紛れ込みはせぬかや。

こなたつかまへてゐて下されや」

と、探る手先に火打箱。がち〜震ふ付木の光

「ヤアコリヤ妹ぢやない伝兵衛ぢや〜」

「お袋兄御。ア、面目もないこの姿」

と、なほも小隅に屈みゐる

「コリヤヤイ〜そのやうにしを〜として見せて、おいらを欺して、おしゆんを突かうとするのか。

へ、その手はくはぬ」

と懐より一通取出し、怖々ながら

「コリヤヤイ伝兵衛。おしゆんとわれと手が切れぬと、科人のわれぢやによつて、妹まで難儀するわい。

それでさつきに妹に得心さして、退状シキジョウが書かしてあるわ。コリヤこれを見いやい。これぢやによつて、

モウ〜〜おしゆんが方に残心気は離れてあるわい」

「ム、スリヤおしゆんがその退状を」

「サア退状ぢや退状ぢや」

「ア、その心とは知らず、いひかはした詞を誠と思つて、迷うて来たが無念なわい。口惜しい」

と齒を喰ひしぼる男泣き。恨みを聞くも隔たる戸口、心はさうぢやないじやくり

「ヲ、さぞ腹が立たう道理ぢや〜〜わいな。マアとつくりと気を鎮めて、退状を見て下さんせいな

ア

「ヲットそれでよい／＼長うものいやんな。屑が出るぞ屑が。コリヤ伝兵衛。おれが読んで聞かしたうても、皆目おれはナニアノ祐筆ぢやわい。サア／＼はやう」

と封じ目切り、突付けられて目に溜る涙を払ひ

「ナニ書置のこと」

「ヤアなんぢや書置ぢや」

「コレ／＼兄正直な。びつくりすることはないわいの。そなたは無筆。わしは盲。書置ぢやと読違へ、うろたへさして門へ出で、娘を存分にせうとのたくみ、ホ、ホ、ホ、そんな嘘はくひませぬ。サア／＼ほんまに読ましやれ／＼。コレ／＼与次郎。表の娘に気をつけて、門の戸をあきやんなや」

「ヲウ吞込んでゐる。こゝにはおれがへ／＼へばりつ

いてゐるわいハ、ハ、ハ、ハ。サア／＼／＼はやう読めやい。ものこそよう書かね、聞くことは祐、ヤナニオウ無筆ぢやないわいサア／＼読んだ／＼／＼」

「エ、誠にこれまでの御養育、海山にもたとへがたき親の御恩。殊さら不自由なる御身の上、なにとぞ首尾よう勤めを逃れ、世を樂に過ごさせまし候はゞ、せめて少しの御恩報じ、孝行の片はしにもなり候はんと、そののみ朝夕祈り参らせ候ところ二世までもといひ交し参らせ候伝兵衛様。思はぬ今度の御身の難も、根を尋ぬればみなわれゆゑに候へば、いまさら見捨て候ては、女おなごの道立ち申さず候。不孝とは思ひながら、ともに覚悟を極め参らせ候」

「母者人。どうやら風がかはつて来たやうなぞや」  
「サイノわしも胸がどき／＼と、サア／＼その後をちやつと読んで下され／＼」

「エ、ともに覚悟を極め参らせ候。先程伝兵衛様へ退状と申して認めしは、このこと申し上げたきまゝ退状と偽り書き残し参らせ候、何事も何事も前世よりの定まりごとと、御諦め下され候。申し上げたき数々は筆にもつくしがたく候へども、心せくまゝ申し入れ参らせ候。ハアさてはさうした心か」と、驚く伝兵衛。親子はうろく

「エ、気づかひなコレ兄や、娘をうちへ、はやうと母があせれば与次郎も、戸口を開くれば走り行く、妹を無理に四人が顔兄合はして溜息の涙はさらに、分ちなく、なんと詞も伝兵衛、泣く目を拭ひ

「一旦いひ交した詞を立て、ともに死なうと覚悟して、義理を立てぬくそなたの貞節。忘れはせぬ、嬉しいぞや。思ひ廻せば廻すほど、われこそ死なで叶

はぬ身、そなたは科のない身の上、ともに死んではお二人の歎き、命ながらへなき後の、とひ弔ひを頼むぞ」

と、詞に『わっ』と泣出だし

「そりや聞えませぬ伝兵衛さん。お詞無理とは思はねど、そも逢ひかゝる始めより、末の末までいひ交し、互に胸を明しあひ、なんの遠慮も内証の、世話しられても恩にきぬ、ほんの女夫と思ふもの大事のく夫の難儀、命の際にふり捨てゝ女の道が立つものか。不孝とも悪人とも、思ひあきらめコレ申し、一緒に死なして下さんせ」

と、隠せし剃刃取直す

「マ、マ、待ちをれくくやい。これで死ぬるとわりや命がないぞよ。コリヤマアなんのことぢや。とんと判らぬやうになつて来たわい。殺しに来たと

思ふた伝兵衛殿より、いまではわれが方が手強うなつたぞよ。コリヤマアどうしたらよからうぞ」

と、いふもおろ／＼母親も

「フ、さうぢや／＼。わが子が可愛い／＼と、子ゆゑの闇に脇ひら見ず、これまでおしゆんがお世話になつた思も義理も弁へず、一途に仲を引分けうと思ふた母は義理知らず。賤しい勤めする身でも女の道を立てとほす。娘の手前面目ない。そなたの心に恥入つてなにごともいひませぬ伝兵衛さんと一緒にのコレ、死出の道連れしやいなう。したがこれもうし伝兵衛さん。定めて親御様たちもござりませうが、親の心といふものは、人間はおろかたとへ鳥類畜類でも、子の可愛いさにかはりはないもの。あすは浮名の草双紙おしゆん伝兵衛といはず気か。もしやお前が死なしやつたと親御様が聞かしやつたら、悲し

うて悲しうて、この世に残つてゐる気はあるまい。

いづくいかなる国の果て、山の奥にも身を忍び、どうぞ逃れて下さりませ、娘が心に恥入つて天にも地にもかげがへない、可愛いわが子を心中に、合点してやる親心こゝの道理を聞分けて、コレ拝みます頼みます」

と、手を合はしたる母親の、子ゆゑに迷ふ闇の闇。二人はなんと詞さへ、涙に涙結ぼるゝ、血筋の別れ与次郎も、涙の雨の古布子袖喰ひしぱりしやくり泣き

「ア、伝兵衛さんの泣かしやるも道理ぢや、またおしゆんの泣きやるも道理ぢや。母者人こなたの泣きやるもなほ道理ぢや／＼。道理々々といふてゐては、ねつからはつからいつまでも分らぬ道理ぢや。ガコレ伝兵衛さん。母者人のいまの詞、御合点が参

りましたか。コリヤわれも得心してくれたか、合点  
がいたか。得心してくれたか。サア〜合点したら  
ばどうぞこの場を立退く分別、しかしその姿では人  
目に立つ。京の町を離れるまで、この編笠で顔かく  
し、幸ひの猿廻し、まめで二人が末長う、めでたう  
女夫になりとげる、門出の祝にこの与次郎が、お初  
徳兵衛が祝言の寿、こなた衆も生別れの盃。ア、イ  
ヤ〜祝言の盃」

と、祝ひ諷ふも声びくに

「お猿はめでたやめでたやネ。賀入姿ものつし  
りと〜、コレさりととは〜、ナウヨウあるかいな、  
さんなまたあるかいな、ヲ、徳兵衛さんへ〜、ご  
ざんせ。あんまりこなさんが来やうが遅いによつて、  
お初さんは顔真赤にして、腹立て〜みやんすわいな  
う。コレお初さん、賀さんが盃をしたいといなう。

機嫌直して盃を戴かんせ〜コレ〜〜〜

、戴くナウ盃を、さんなまたあるかいな、ヤコレ

〜賀さん、足で盃をさすはあんまりつれない。そ

れでは嫁御さんが戴かんせぬわいなう。ひぞらずと、

ほんまにさしてやらんせ〜。へ〜、さうぢや

〜〜〜、そこでお初が戴いたものぢや。コレ

戴くなう盃を。さんなまたあるかいな、コレ嫁御の

昼寝もころりとせい〜。ナコレエ、あるかいな、

さんなまたあるかいな、コレ賀さん、あんまりつれ

なうさんすによつて、おしゅんイヤナニ嫁御さんが

起きさんせぬわいの、そこでヤチヨイ〜〜と

起したり、起すのぢやがな、またてんごうしておる

な、起さんかい。シイ〜〜これはしたりオレの

顔まで掻きをるかい。エ、なんさらすとつともさり

とは〜ノウヨウあるかいな、さんなまたあるかい

なア。起きたら互に抱付きやれ、ヲ、それで機嫌が直ったぞ。エ、、、あるかいな。さんなまたあるかいな。くるりと返って立ったりな。立ってくれ。コレ、立たしやませ。ついでに日和を見てたもれ。ア、よい女房ぢやに、ノウあるかいな。さんなまたあるかいな。日和を見たらば落ちてたも、ヲ、そうぢや、お猿はめでたやめでたやな。

「サア、きりきりこの家を、猿廻し」

まさるめでたう、いつまでも、命全うしたもと目は見えねども見送る母。詞もこの世で聞納め、心のうちの暇乞あすの噂と形ふりもやつす、姿の女夫連れ。名を絵草紙に聖護院森を、あてどにたどり行く。